文貞實著

『ライフ・トークの社会空間

——1990～2000年代の女性野宿者・在日朝鮮人・不安定労働者』

評者：山口　恵子

語ること・語られること

著者（文さん）を，評者（山口）は個人的によく存じ上げている。文さんのインタビューはすごい。何がすごいかというと，ともするとインタビュー中に調査協力者以上に語る。評者は直近では本書の第4章の労働組合でのインタビューをご一緒したことがあるが，文さんはとにかくしゃべる，しかも早口で。ユニオンの方も情報が欲しいと思うので意識的に話すようにしているの，と文さんは言うが，決してこの相手に限ったことではないことを私は知っている。そして，文さんは確かに語るが，いつのまにか調査協力者もものすごく語ってくれて，最後はなんだか和やかな雰囲気になっている。私はこの文さんのインタビューのやり方を「アグレッシブ・インタビュー」と密かに呼んで，私にはまねできない，職人芸的なインタビューの方法として尊敬している。語り，語られるインタビューなのだ。

そうしたインタビューや丁寧なフィールドワークを含め，豊かな質的データで構成された本書は，これまでの長年にわたる著者の研究成果の集大成の一つであり，既発表論文を集約した博士論文を下地として，加筆・修正してまとめられたものである。評者は大学院生のころから著者と研究会や調査をご一緒させてもらい，常にその研究成果や研究姿勢から学んできた者の一人である。この大著を評するには僭越な身ではあるが，書いてみたい。

まず，本書の概要をまとめておこう。本書の目的は，「山谷の野宿者，在日朝鮮人，そして労働市場の周辺化された労働者，移住労働者のライフ・トークをとおして都市周辺に位置づけられた彼ら彼女らが，どのように働き，どのように生きているのか，彼ら彼女らの『ライフ／生』の実践から，『社会空間』がどのように〈生きられる空間〉として生成されているのかを問うもの」であり，「ライフ・トークというひとびとの人生の語り，生きてきた記憶が社会空間の語り，社会空間の記録へどのように変換されるか，その過程をとおして，どのように社会空間＝『生きられる経験の空間』が立ち現れるかを実証的に明らかにすること」（9-10頁）である。ルフェーブルやソジャらの空間の生産論，またセルトーの空間の戦略・戦術論を下地としつつ，社会空間の位置づけられ方と生きられ方の双方に焦点を当て，ひとびとの「ライフ／生」が明らかにされる。

本書において注目されるのは「ライフ・トーク」である。著者は，近年のインタビュー調査による「ライフ／生」の語りが，「ヒストリー／史」の分析から「ストーリー／語り」の分析に傾斜していき，研究者自身が語ったひとの存在そのものを見失っていることを批判する。そして，人生の語りの「ライフ／生」それ自体に注目するために，「ライフ・トーク」という用語を用いている。ライフ・トークとは「ひとびとの人生の語りであり，ひとびとの生きた記憶であり，そして，ライフ・トークそのものをひとびとの『生きられた経験の空間』が立ち現れ

る瞬間と考える」(37 頁)。その際，ここでの「ライフ／生」は，韓国語における「삶（生・人生・暮らし)」として捉えるという。「この韓国語の「삶」は，「ライフ／生」の含有するもの，いま，目の前で語るひとびとの生の営み，人生，生きることそのものを内包する」(38 頁）とされている。

本書の全体構成はシンプルであり，序章と終章，その間に都市周辺層としての「寄せ場」「女性野宿者」「在日朝鮮人」「労働運動」がそれぞれ章立てされている。困難な状況下にあるこうした都市周辺層へのアプローチは難しく，1 つの章の対象だけでも調査・研究には膨大な時間がかかる。それに研究者は往々にして，エスニシティ研究，ホームレス研究，ジェンダー研究，社会運動研究などのように，領域で分断されがちである。そうしたなかで，著者は長年にわたって丁寧な調査・研究を積み重ね，各層の社会的世界を横断的に見せてくれる。以下，各章の内容について簡単に紹介しておきたい。

目的や方法が示された序章に続き，第 1 章の対象は「寄せ場」である。東京の山谷の簡易宿泊所街の形成と変化のプロセスについて，1990 年代前半までの簡易宿泊所経営者や野宿層への質的調査のデータを用いて記述している。とくに，バブル期をはさんだ激変期における簡易宿泊所経営者へのまとまったインタビューは貴重な歴史的資料となっている。第 2 章は「女性野宿者」である。隅田川河川敷のブルーシート群，上野公園のテント村，浅草の路地，そしてグループ・ホームなど，さまざまな場所で出会った女性野宿者の「ライフ／生」について，とくに労働とジェンダーに焦点を当てつつ分析が行われている。この元となった論文が初出されたころ（2006 年）には，評者を含め，野宿者といえば男性を念頭においた研究が大半だったなかで，社会学的に女性野宿者を正面から扱った画期的な論考だった。第 3 章の対象は「在日朝鮮人」である。神戸市長田地域と東京都足立区の在日朝鮮人の集住地域に焦点を当て，そのエスニック・コミュニティや地域産業の形成・展開過程について明らかにしている。クリアランスなどの抑圧的な政策が推し進められるなかで，地域を超えたネットワークが社会的資源として生かされていることへの注目は，社会学的に興味深いものである。第 4 章の対象は「労働運動」である。1980 年代以降，個人単位でも参加可能で地域に根差したコミュニティ・ユニオンが続々と誕生していった。本章はそれらのユニオンのなりたちや展開，活動や組織の特徴について，主に活動家や専従組合員などのリーダー層へのインタビューから記述している。移住労働者を含む非正規労働の組合員の劣悪な労働環境の実態も多様に描かれており，それに対抗するユニオン運動がつくる社会空間の公共空間としての可能性が指摘されている。最後の総括である終章は，語ることが困難な著者の母親世代の話から始まる。個人の経験が語られない一方で，特定の社会的な言説は拡張して，ある歴史が実体化されていくことを著者は批判する。そして改めてひとびとの「ライフ／生」の「対話」としてのライフ・トークの重要性や，都市空間の意味を書き換えながら都市の内部に在ることが強調される。

本書の魅力や意義は多岐にわたるが，疑問も含めて 4 点にまとめておきたい。まずなんといっても本書の魅力は，多様な「ライフ／生」＝「삶」の実践としての記述の豊かさである。綿密な調査によって，都市周辺層の生の実践が生き生きと描かれている。

例えば，1956 年生まれの家族経営の旅館経営者は建物内や隣接家屋に家族で暮らし，山谷で労働者とともに生きてきた。「子どものころ，労働者にかわいがられた。出稼ぎのひとなど，

みんな子どもを故郷においているから，わたしがかわいかったんだと思う。労働者は情緒を大事にする。季節の変わり目，七夕，正月など花を一輪飾るようにとくれた。『おまえは幸せになれよ』と人生を託しているようだった。祖母の経営方針が客に還元することだったから，冷暖房もないベッド式の旅館のほうは，夏は団扇，冬は帳場やテレビ室のストーブを消灯時間まで置いた。くじ引きでカップ麺やホカロンをプレゼントしたりもした。（山谷について）高校生のころ，友人を呼べなかった（山谷というと，恐ろしい街と思われていた）。巣鴨の高校に通っていたが，担任から〇〇さんは家庭訪問はだめねと言われた。山谷地域は差別されていると思った。ほんとうは他の地域に比べて治安はいいのに」（74 頁）。

出稼ぎ，寄せ場，差別，そうした山谷地域の特徴として語られがちな事柄とともに，出稼ぎ労働者が自分の子どもと重ね合わせてかわいがってくれたという想い，人生を託されたように感じること，家庭訪問を拒絶されたくやしさなど，インタビューの時点（1990 年）で過去を振り返っての語りであるが，共に生きてきたひとびとの生活や意味づけが具体的に垣間見え，「生きられる経験」としての山谷の社会空間のリアリティがせまってくる。

第二に，その生の実践の読み解き方である。優れた「耳を傾ける技術」を持つ人は，豊かな語りを相手から聴いたりそれを編集するだけではなくて，そこから何を聴くべきか，社会の読み解き方を見せてくれる。

本書で評者が最も印象深いのは，やはり女性野宿者の章である。著者は意識的に多様な状況にある女性たちの声と姿を，参与観察等も重ねながら，その場で見て，聴く。女性たちの生は過酷だ。20 歳代のユウさんは転々としたアルバイト生活ののち上野公園で声をかけられ，野宿者グループの世話を受けるようになったが，暴力と賃金の搾取を受けるようになる。レズビアンバーに勤めた経験があるダイさんはグループ・ホームでスタッフらとの間に確執が生じ，去っていった。インターセクショナリティという言葉こそ使われないが，ひとびとはずっと女性であること，貧者であること，年齢を重ねることなど，さまざまな不利が交差するなかで生きてきた。

しかし，上野公園で暮らしている女性は語るのだ。「これから仕事とかどうするの？ あたし？ いまは，ちょっと休んでるんよ。テント生活しんどくない？ ぜーんぜん，ない。いまが一番しあわせだよ」（125 頁）。彼女の語りは，野宿生活は当然しんどいもの，という一般的なイメージとは異なるし，当時の評者はこうしたことを記述すると，支援の必要はないというメッセージになってしまうのではないか，と書くことを躊躇していた。しかし，著者は躊躇しない。書く必然性があるからだ。つまり，女性野宿者たちは路上に出る前も，途中でも，また野宿生活のなかでも「主婦」「妻」「女」であることが常に要請されていると著者は言う。そして，「彼女たちのライフ・トークは，社会的・経済的に要請される位置において，空間的に再配置される位置において，永久にではなく『とりあえず』回収されてしまってもかまわないという身振りや語りをとおして，彼女たちを類型化したり，抑圧したりすることに対する矛盾にみちた“抵抗”の可能性を示しているといえる」（168–169 頁）と指摘する。

「社会学的想像力」を言うのはたやすいが，それを説得的に示すのは簡単ではない。他者を解釈することに対して「認識の暴力」との批判がありうることも引き受け，それでもなお収奪への抗いを読み解くのだ。

第三に，方法論としてのライフ・トークの概

念の意義である。その内容自体は，特段に目新しいことではない。質的調査を行うものであれば，そう呼ばずとも手にしていたものである。それに対して，あえて「ライフ・トーク」という概念が提起されたのには，著者の強い不満がある。生活史に関する著作を近年精力的に発表している岸政彦は，ライフ・ヒストリー研究が歴史と構造に直接かかわる特定の知識を得ることを目的とすること，およびライフ・ストーリー研究が対話的構築主義的立場によって語りを事実と捉えないこと，の双方を批判する。そして，一見見逃されがちな語り手本人の生い立ちや暮らしぶりからたちあげる「もうひとつの生活史」研究として「人間に関する理論」の必要性を説く（岸 2018）。

著者は岸のそうしたスタンスに共鳴しつつ，「都市周辺層のライフ・トークは，社会的に構築されるナラティブではない。ひとびとの『ライフ／生』は現実社会と向き合うひとびとの実践である」（326 頁）といい，「ひとびとの語りには正確な口述資料として意味があるのではなく，ひとりひとりの固有な『ライフ／生』の記録として意味がある」ことを強調する（316 頁）。評者も著者らの指摘には強く共感するものであり，議論のさらなる展開を試みて，ライフ・トークの意義を強調するのは理解できる。とくにその概念が有意味だと思えるのは，生活史といえば一定時間をかけて，ときに同じ人に繰り返しのインタビューを行って，人生を丹念に聞くイメージが強い。しかし本書でとくに大切にされているのは，断片的な語り，不連続な語りである。流動性の高い調査対象者とのその場限りのやり取りは，代表性がない，事実かどうか危しい，要するに取るに足りないデータとみなされがちである。それに対して著者はいま・ここ，でたちあがるトークとして積極的な意義を与えてくれる。ただし，主観性をどう考えるか，相互行為の問題，研究者の立場性，一般化をどう考えるかなど，詰めるべき諸点は多い（例えば朴 2023）。ぜひ著者には方法論に特化した次作を期待したい。

加えて，これまでの生活史研究が「生」「生活」の部分をないがしろにしてきたわけでは決してないだろう。それを前提として，生活史に焦点を当てた研究の知見を一般化するにあたって，方法論の議論に収れんしがち，ということだと思われる。そうした意味では著者もまた，その一般化をライフ・トークの方法論に求めていくのは変わりないことである。そして「生」を重視するのであれば，日本語のライフから韓国語のライフ（「삶（サム）（生・人生・暮らし）」）を強調することの中身や意義をもう少し説明する必要があるようだ。

第四に，都市周辺層を扱った社会空間論の都市社会学的な意義である。著者は「空間」に対する関心を手放さない。とくにひとびとが構造的に位置づけられ，同時に主体として都市を書き換えていく，そのミクロとマクロの双方を視野に入れることができる社会空間論はフィールドワーカーには魅力的な理論である。とくに都市研究ではその枠組みを参照した優れたエスノグラフィーが多く生み出されており，本書もそこに並ぶ貴重な作品である。

しかし一方で，それぞれの社会空間の議論は独立しており，全体として像を結びにくい。つまり，一人の研究者が多様な周辺層に横断的にアプローチできていることのメリットが十分に生かされてはいるとは言い難い。歴史的・地理的なレンジ，政治・政策的なレンジ，労働市場のレンジ，公共空間のレンジ，それぞれが章によって多様に扱われており，その固有性はよく分かるものの，共通するマクロな社会構造の解明にはいたっていない。グローバル経済の深化と雇用の不安定化のすすむ日本および東京の

1990年代および2000年代が歴史上のマイルストーンであったことをよく理解する上でも，さまざまな都市周辺層がどのような共通する構造変動のもとにあったのか，背後にある現代資本主義や国家・都市政治を視野に入れた理論的展開も今後期待されるところである。

最後になるが，著者は「不平等の構造的問題は，そこで不利益をこうむっているひとたちが沈黙し，批判しなければ，決して解消されない」（337頁）と言い，本文の最後のケースが労働運動の闘い方の実践で締めくくられるのは理があることだと感じる。闘うためにも，か細く断片的な声にも耳を傾け，「ライフ／生」の意味に向き合う調査・研究を続ける。著者の「アグレッシブ・インタビュー」は人生をかけた対話なのだと，改めて感じた。著者の次作にも期待したい。

（文貞實著『ライフ・トークの社会空間――1990～2000年代の女性野宿者・在日朝鮮人・不安定労働者』松籟社，2022年3月，339＋14頁，定価3,800円＋税）

（やまぐち・けいこ　東京学芸大学教育学部教授）

【参考文献】

岸政彦（2018）『マンゴーと手榴弾――生活史の理論』勁草書房

朴沙羅（2023）『記憶を語る，歴史を書く――オーラルヒストリーと社会調査』有斐閣